

総合問題(複)

(問題)

2023年度

〈2023 R05170015(総合問題(複))〉

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～5ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

	万	千	百	十	一
(例) 3825番⇒		3	8	2	5

5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
7. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

以下の2つの資料は、外国語・文学・翻訳に関わる内容である。資料を読んで以下の問いに答えなさい。

問題1 【資料1】の内容を300字以上400字以内で要約しなさい。

問題2 【資料1】【資料2】の類似点をそれぞれの文章から引用することで指摘しつつ、「自動翻訳」の精度がますます高まりつつある昨今の状況を踏まえ、外国語・文学・翻訳についてのあなた自身の考えを1,000字以上1,200字以内で述べなさい。

【資料1】

結論からいおう。翻訳文学に興味を失った文化とその言語は、はてしない同語反復におちいり、頹廃し、衰弱する。停滞し、腐敗する。唾棄すべき外国嫌い^①と偏狭きわまりない自国自文化崇拝がはびこり、閉ざされた黄昏のよどんだ空気の中で、陰湿な相互攻撃ばかりがつづく。あるいは、わずかにでも異質であると感じられる人々への、容赦ない冷酷な排除が牙をむく。これだけ明確に戦うべき相手がいくらでもいる以上、はっきりいわなくてはならない。ぼくらは翻訳文学を読むべきだ。つねに読むべきだ、いくらでも読むべきだ。

もちろん、だれにとっても時間はかぎられている以上、だれもが世界のあらゆる地域の最新の文学のすべてを追いつづけるわけにはゆかない。あたりまえのことだ、地球の人口は60億に達し、だれに頼まれなくても作品を書きつづける作家はいたるところにいるのだから！ でもせめてひとつの異なった文化を背景とした、ひとつの外国語から翻訳されたひとつかふたつの作品を、それがどれほど自分とはかけ離れた世界のものであっても一年に一度は手にしてほしいと思う。それは別にきみの役には立たない。でも、心を打つかもしれない。きみを動揺させるかもしれない。そんな風に偶然手にとって読める作品、みずみずしい新鮮さにみちた強烈な作品、派手な広告とは縁遠い聞いたこともない作家の作品は、いまでも、これからも、すでにきみに読めるかたちで、思いがけない片隅にころがっている。

19世紀に一応の完成を見たヨーロッパによる世界制覇が、アジア・アフリカの旧植民地のあいつぐ独立というかたちばかりの終結に達したのが、20世紀中葉以降の世界史の最大の流れだった。それで植民地主義が終わったわけではない。経済的支配のあり方が、ただ別の段階に移行したというだけのことだ。その一方で世界の人口はとめどなく成長をつづけ、国際貨幣経済を背景とする全地球的な物質交換は飛躍的に増大し、それに平行して多数の人の国境を越えた移動が日常化した。貨幣の首都とでもいうべき先進諸国の大都市では、自分とは異なった背景・言語・文化の人々と接触することはだれにとっても生活の一部となったし、そうした未知の隣人たちとのつきあいに、ある種の洗練と「正しさ」を模索することはだれにとっても義務となった。

そう、あえて「正しさ」と呼び、義務と呼ぼう。1996年末、ペルーの日本大使公邸占拠事件が起こってから、日本に住む日系ペルー人たちに投石や突然の解雇といった信じがたい嫌がらせがあいついでいるという報道に接したことは、記憶に新しい*1。それが「文学」といったいどんな関係があるのか、ときみは思うかもしれない。だがぼくは、まさにそれは「文学」の問題だと思う。それは一方で、反政府ゲリラもフジモリ政権*2の当事者もひとりひとりの国民も区別なく「ペルー人」という存在をすべて同一視して嫌がらせに走る愚昧で卑劣な人間が、まさに「ペルー人」という無差別的なカテゴリーを言語によって設定しそれにしたがって行動しているからであり、他方でそうした外国嫌い（異物嫌い）の無意識的噴出である嫌がらせがいかに恥ずべきことかという判断を醸成する「場」もまた、言語を使って歴史的につみかさねられてきた層にほかならないからだ。

「部分」をもってただちに「全体」に代えるのはあらゆる全体主義の常套的修辞であり、そうした全体主義の欲望を暴きだすことは（一見どんなに無力に見えようとも）まず言語という平面で試みられなくてはならない。無意識が下す命令に抵抗することができるのは、忍耐強い意識化の努力だけなのだから。語られる言葉の内容、言葉の使用方法がもっとも鋭く問われるのは、「文学」という、定義上われわれが生きる「現実」からは一歩引いた地平にひろがる言語的吟味の領域でのことだ。そこでは絶えず新たな問いが問われ、新たな答えが探られる。それは「現実」の直接性（ただちに反応しなくてはならないという必要）を欠く分だけ多くの時間を費やして、ある行為や言葉の意味と射程をよく考えてみることができる。

ある唯一の宗教や社会道徳や政治的イデオロギーの専制的支配から抜けだした後の混沌とした異種並存社会に生きるとき、ぼくらの下す判断はすべて必然的に「文学的＝批評的」なものとならざるをえないし、それはぼくらにいまだかつてなかったほどの大きな自由への可能性を与える。すべては、まだはじまったばかりだ。すべては、これから試みられなくてはならない。ぼくらはつねに新たに、そう決意する権利がある。でもその自由とは、また何の保証もないことの裏返しでもある。何の保証もない真空じみた空間で、自分がどのような自分を、あるいは社会を、生きてゆきたいのかというデザインは、結局は言葉を使った終わりのない（自分との、他の人々との）対話による以外には

ない。文学作品を読むことはまったく無縁な生活をしている人だって、必ずそうしているのだ。自分の経験を言葉で描写し、反芻^{はんそう}し、未来の計画を言葉で練り、想像し、自分という物語の束を編み上げ、それを社会に投影している。

いかえれば文学は、実際に、人を作る。あるいは文学の核心をなす翻訳は、人の感受性と思考を造形する。「翻訳的人物だね。翻訳人です」と、みずからをさして、ある老いた小説家がいったことがある。目が覚めるような、驚くべき言葉だ。これに対して、そのころはまだ四十代半ばだった批評家は「僕も翻訳文学者たることを心掛けている」と受けた。1948年のこと。もう半世紀以上むかしの話だ^{*3}。モーパッサンに心酔した自然主義作家、正宗白鳥は、自分が子供のころから「西洋崇拜」だったということを自嘲しつつそういった。けれどももちろん、それが正しかったということを、彼は知っている。これに対して、ランボーを翻訳し、バルクソン、アラン、ヴァレリーを読んで批評家になった小林秀雄は、それを信条の問題として捉えなおした。ぼくはこの態度に与^よずる。

じつはぼくらは、だれもが多かれ少なかれ「翻訳人」なのだと思う。西欧諸語からの翻訳によって猛烈な変形をこうむり、その混乱の中から数十年をかけてさまざまなことがいえるように鍛え上げられてきた近代日本語を使って生きるかぎり、人は「翻訳的人物」であることをまぬかれない。それをいえば、起源も系統も不明^{かくはん}の日本語という言葉は、そのはじまりから北から南から列島に移民し流入したさまざまな人々の言葉が入り交じり攪拌されて編み上げられてきたものだ、というところまで話を戻さなくてはならないだろうか。

〔中略〕

若き白鳥たちにとっての「西洋」は、まずは実体を欠くイメージにすぎなかったが、そのイメージの衝撃は実際に「翻訳的人物」としての私を造形し、そのような私として「この邦で」生かすことになった。翻訳が生みだす現実の亀裂、予定された世界の進行にまぎれこむ偏差が、私の生涯においてかたちをとり、実現される。私とはフィクションにすぎないが、この作られた私においては、私に代わって私を生きてくれる存在はない。一方、それにつづく世代にあたる小林は、文学者という職業的自己規定の上で「翻訳文学者」であることを心がけてきたのだという。翻訳というプロセスを意識し、その操作が作りだす私を意識しながら、新たに文の生産にとりくむ。自分を「日本」という社会的舞台で暮らす「翻訳的人物」だと呼ぶ白鳥よりも、小林はさらに屈曲した地点に立っている。

ここで「翻訳」という言葉に、少なくともふたつの層を区別したほうがいいかもしれない。積極的に翻訳をおこなうことを活動の中心にすると決意する批評家がここで念頭におく翻訳が、そのもっとも根源的な層においては、単に外国語で語られた思弁の反復や理論の適用などではないことは、明らかだろう。あらゆる思考の発生の瞬間にある翻訳——見慣れないもの、徹底して異質なものを稲妻の閃光のうちに見とり、本当には語りえないその残像を言葉で包囲しながら、暴力的に切りつめ、精密さを断念しつつ文の網にすくいにとってゆく行為——に、彼はここでふれている。

そうした翻訳にとっては、じつはオリジナルが外国語か自国語かというちがいは、結局はどちらでもいい。けれども同時に、通常の意味での「翻訳」という行為がもつ圧倒的な厚みと力を無視することはできない。外国語と格闘し、あるいはその翻訳文（それはすでに一種の外国語だ）を苦勞しつつ読むという抵抗にみちた迂回を経てはじめて、人は自国語内の翻訳というごちなく苛立たしい経験さえも発見できるのだ。いかに多くの言葉が、われわれにとっては見慣れないものであることか。あるいは、その見慣れなさが突如として流れる水晶の輝きをおび、われわれの生に（たとえそれ自体は無意味であっても）輝かしい読点を打つことか。そうした経験がたしかにあると信じられるからには、小林のいう「翻訳文学者」を単に「文学者」と呼んでもさしつかえないだろう。それは異質な思考、異質な言葉のアレンジメントを、ある言語に移入しようと試みる者のことだ。「国語」の安定に奉仕し、飼い馴らされた文章の整然としたふるまいのみを期待する者は、「文学」という経験の動揺には、そもそも何の関係もない。あるいは「翻訳」という迂回がないところに、「文学」はない。

（管啓次郎『コヨーテ読書——翻訳・放浪・批評』青土社、2003年）

出題者注

* 1 この文章が書かれたのは1997年のことである。

* 2 日本大使公邸占拠事件当時、ペルーの大統領は日系人のアルベルト・フジモリだった。

* 3 * 1を参照のこと。

【資料2】

ペテルブルグで通うことになる学校に初めて着いたとき、目の前に現れたバロック様式のお城のような建物が「学校」だとは、ちょっと信じられなかった。

その語学学校は、ペテルブルグの左端にあるスモーリヌイの建物群のなかにあった。中央にあるスモーリヌイ大聖堂をぐるりと校舎が取り囲む造りのこの学校は、もとはエカテリーナ2世の時代にスモーリヌイ女学院として貴族の子女の教育のために創立された学校であり、帝政時代の女子教育の先駆的な存在だった。そしてロシア革命期の1917年にはここでソヴィエト政権の独立宣言がなされ、首都がモスクワに移されるまでのあいだは革命本部が置かれていた。さらにソ連時代、第二次大戦期には地下が掩体壕として利用され、戦後には建物の修復作業がなされて、ペテルブルグの歴史資料展などがおこなわれていたという。

そんな歴史ある建物の一角を借りて授業がおこなわれていた語学学校は、主にヨーロッパからの留学生の多い自由な雰囲気のある学校だった。ソ連崩壊から10年と少ししか経っていなかった当時、先生たちは留学生の反応をみながらこぞって新しい教育方法を模索し、新しい教科書や問題集の作成に熱心で、その意欲がこちらにもガンガン伝わってきた。

クラス分けのテストを受けて入ったクラスにいたのは、ドイツから来たジルケという女の子と、フランスから来たジャン＝フランソワという男の子、イタリア人の男の子二人組、ドイツで育ったロシア系移民の女の子、トルコ人のおじさんといった多彩なメンバーで、会話の授業では先生が楽しそうに「ロシア人はあまり笑わないって言われるけど、実際に来てみてどう？ あなたたちの故郷では街角でもみんな笑っているの？」といった話題をふっては盛りあがっていた。

会話のほかにも、筆記、文法、映画鑑賞、小話を読む、ロックの歌詞を読む、といった授業があり、それぞれ個性的な先生が教えていたが、私がいちばん好きだったのはエレナ先生が教える文学精読の授業だった。

茶色い髪を後ろでちいさなおだんごに結いた小柄なエレナ先生は、40歳くらいだろうか。いつもなにかに困惑したような難しい顔つきをしているけれど、話をするとその「難しい」顔がじつくりとこちらの話に聞き入ってくれるのがわかり、いつまでも話していたくなるような雰囲気がある。服装はいたって素朴で、毎日同じ紺のフリースジャケットを着ていた。日本でも1990年代後半に大ヒットしたフリースは、安価で防寒に役立つのでロシアでも幅広い層に人気を集めていたが、あまり質がいいとはいえないものも多く、連続して着ればすぐに毛羽立った。エレナ先生の着古してぼろぼろになったジャケットはお世辞にもお洒落とか格好いいとかいう類のものではなく、むしろこの先生はそんなに生活に困窮しているのだろうかとかさえ思わせた。

しかしそんなことはすぐにどうでもよくなった。エレナ先生の服はもちろん、自分の着るものもどうでもよくなった。そのくらい、授業が楽しすぎたのだ。それまで主に散文しか読んでいなかった私は、この先生から初めてロシア語で詩を読む喜びを教わった。エレナ先生はツヴェターエフ、アフマートフ、ブロークといったいわゆる銀の時代^{＊1}の王道の詩をすらすらといくらでも暗唱する。その朗読があまりにすばらしいので、詩の意味などほとんどわからなくても「あんなふうに読みたい！」と憧れて、寮に帰ってから配られたプリントに並ぶ言葉をひたすらぶつぶつと繰り返した。

[中略]

すっかりエレナ先生の授業に夢中になっていたころ、ある幸運が舞い込んだ。学校が、手違いで私が払った学費に対し授業のコマ数が少なくなっていたから、そのぶん追加で好きな先生の個人授業を受けさせてくれるというのである（いま思えばこれはかなり良心的な対応だ。ロシアの大きな大学が資金の工面のために留学生を受け入れているような場合、在学中に予告なく授業料や寮費が数倍に値上がりした、などという話はざらに聞く）。

私は迷わずエレナ先生を頼んだ。そうしていつもの授業のほかに、先生と一対一で好きな作品を読み、話をする機会を得てしまった。幸せだった。

ペテルブルグに来て二度目の冬が近づいていた。あたりまえのことだが、夏が白夜なら冬は暗い。朝8時のバスで学校へ向かうときはまだ夜中のように暗く、学校の食堂の昼食をとるころにわずかに空が白むが、午後の授業を受けているうちにまたあっという間に暗くなってしまう。だから通常の授業が終わったあとのエレナ先生の個人授業はいつも薄暗かった——当時のペテルブルグでよく用いられていた照明は日本でいえばバスルームにあるような電球で、点けても部屋の中央を心もとなく照らすだけで、明るいとは言いがたい。

グループの授業がひととおり終わったあと、私は薄暗い廊下をずっと進んだ先のつきあたりにあるちいさな部屋へ向かう。その部屋で私は先生と一緒に、ロシア語をはじめたきっかけでもあるレフ・トルストイを読み、新たに好きになったブロークを読んだ。トルストイなら『クロイツェル・ソナタ』^{＊2}を読みたいと言うと、エレナ先生は「個人的にもすごく大事な作品」だからぜひ読もうと言った。あまりに目をざらざらと光らせて身を乗りだすので、不意

に怖くなったほどだった。授業を進めながら、先生はその理由を話してくれた。『クロイツェル・ソナタ』は、主人公ポズドヌィシェフが妻の浮気を疑い、発見し、嫉妬にかられて刺し殺す話である。先生は過去に、結婚相手に暴力をふるわれ離婚していた。その経緯には相手の「嫉妬」という感情が大きく作用していたという。だからこの作品に関心を持つ理由は過去のつらい話に直結していたのだが、先生は驚くほど率直に、自分の感じたこと、後悔していること、いまでも考えていることなどを打ち明けて、私に「一緒に考えよう」と語りかける。この時期、私はそれまで知らなかった単語をたくさん知り、それを実際に使うことにドキドキしていた。しかも、そのドキドキと一緒に覚えた言葉は決して忘れないのだ。語学学習という、一般的には表面的な会話や社交辞令のような言葉から入ることが多い。むしろその便宜性、妥当性は充分にあるにしても、しかし私たちの心の底にあるのはもっと根源的な、どろどろとした得体の知れないものだ。そのどろどろを掬^{すく}って言葉にしていくことは、その言語で思考できるようになるための第一歩なのかもしれない。

そんなふうに授業を受けていたある日、エレナ先生がふと「あっ、鳥が……」と窓の外を指した。顔をあげると確かに、雪で覆われた窓のすぐ外にある木の枝に一羽の鳥がとまっていた。先生は、「あなたは絶対にこの瞬間を忘れないわ」と続けた。「一緒に『クロイツェル・ソナタ』を読みながら、恋愛や社会制度や嫉妬や、そのほかありとあらゆる話をしたことも、窓の外には雪が降って、鳥がとまっていたことも。あの鳥を、あなたは絶対に忘れないわ」と。そう言われて、私は「ああ、ほんとうにそうなんだ」と思った。この瞬間を、あの鳥を、私は生涯忘れないだろうと。

それは言葉の魔法だった。文学に精通していたエレナ先生は、どういうときにどういう言葉を使えばそこに魔力が宿るのかについても、知り尽くしていた——まさにあの瞬間に（ほかのときではだめなのだ）、私にそうして魔法をかけることで、あの空間やあの鳥が、特別なものになることを。

（奈倉有里『夕暮れに夜明けの歌を——文学を探しにロシアに行く』イースト・プレス、2021年）

原注

* 1 19世紀末から20世紀初頭にかけて数多くの詩人が輩出された時代で、象徴主義、未来派、印象派などさまざまな流派が生まれた。

[以下略]

* 2 1887～89年執筆。[以下略]

〔以 下 余 白〕

〈2023 R05170015 (総合問題(複))〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

採 点 欄	[1]		[2]	
	+	-	+	-

〈2023 R05170015 (総合問題(複))〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

総合問題（複）
（解答用紙）

注 意

1. 受験番号（算用数字）・氏名は指示に従ってただちに所定欄に記入し、それ以外に記入してはならない。
2. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
3. 解答はHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで書くこと。
4. 試験終了時にはこの解答用紙を裏返して机の上に置き、指示を待つこと。

問題 1

300字

400字

+	-

問題 2

A full-page view of a blank sheet of graph paper. The grid consists of small squares formed by dashed lines. There are no margins or additional markings on the page.

+	-